三十四回展受賞者の声

文部科学大臣賞…黄昏」(絵画)石原　修

絵を描き始めた三十代の前半、美術全集で或る画家の油彩画に出合い、衝撃を受けたことを憶えています。荒々しいタッチで、今にもカンバスから飛び出さんばかりの、勢いのある絵でした。フォービズム(野獣派)の影響を受けた佐伯祐三の絵でした。

絵は生きていなければならぬ、美術は生きて、脈打っていなければならぬ。」洋画家中川一政の言葉です。

同時代に生きた二人に、交友関係はなかったようですが、生涯を通して自らの生命力をカンバスにぶつけ、“生きている絵”を追求し続けた画業に共通点は多いように思います。

興奮冷め遣らぬある日、佐伯祐三がカンバスを立てたパリの裏街に、彼の、絵に傾けた情熱の爪の垢ほどでも感じ取れないかと、スケッチブックを持って佇ずみました。

そこには、長い歴史を見つめてきた薄汚れた壁と、人々の息衝きがありました。この苦むした汚い壁の前に立った佐伯祐三は、“生きていることの喜び”を感じ取ったに違いありません。

絵は芸術ではない。絵の中に呼吸し蠢(うごめ)いているものが芸術である。絵は汚くても良い。絵は生きているか、死んでいるかが問題なのだ。」パリの裏街風景をスケッチしながら、中川一政のそんな言葉に佐伯祐三を重ね合わせていました。

二人の生き様を教科書に、誰のものでもない自分にしか描けない、独自の絵画を模索し三十余年が過ぎました。

この度出品致しました「黄昏」が、栄誉ある賞を頂き大変光栄に思っております。これに驕ることなく、これからも鼓動する絵を捜し求めて描き続けたいと思っています。今後とも、ご指導の程よろしくお願い致します。有り難うございました。

東京都知事賞　輪廻転生」(絵画)古林秀子

この度は、思いもかけず立派な賞を、頂きまして有り難うございました。今年で新日美に入会して九年になります。最初は皆様の素晴らしい、絵や工芸に圧倒され、自分の絵の未熟さが、恥ずかしく、少しでも皆様に近づけるようにと、願いながら描いてきました。

描くことが楽しい時期もありましたし、どのように描いてよいかわからない時期もありました。舅や姑と同居していましたので、日々の葛藤は絶えず、又、介護も始まり、一生懸命にしていても，罵詈雑言(ばりぞうごん)を浴びる日も多く、心身ともに挫けて、泣いている日々の中で描いた絵もあります。

辛ければ辛いほど、苦しければ苦しいほど、絵に向かいました。描くことで自分を慰めていました。真っ暗な心で描いていましたので、描いた絵も心の反映で、暗く惨めな絵になるだろうと、予想しましたが、出来上がってくる絵は、明るく力強く、楽しそうな絵でした。

その絵が完成した時に、私は自分の心が、挫けていないこと、明るさを失っていないこと、生きていこうとしていること、心が死んでいなかったことを知りました。それを知った時、絵が自分を助けてくれたことがわかりました。新鮮な驚きでした。

絵に励まされるなどと、思ったことも無かったからです。有り難く涙が一杯溢れました。その時から、絵は私の友人であり、パートナーであり、勇気づけてくれるものになりました。

絵が隣にあるとき、友人と共にいる気がします。絵が語りかけてきます。挫けずにね！　笑ってね！　などと、その友人が東京都知事賞という素晴らしい賞を、プレゼントしてくれました。本当に有り難いです。

これからも精進して参りたいと思います。そして、いつもお世話になっている京都支部の皆様、導いて下さった新日美の皆様有り難うございました。感謝します。

東京都議会議長賞　動」(工芸)鈴木　勇

この度は、東京都議会議長賞を頂き誠に有り難うございます。これも、新日本美術協会の皆様のご指導と私を支えてくれる仲間が居たので、この賞を頂くことが出来たと思っております。

私は長く絵画に取り組んで参りましたが、面の世界では表現しきれないもどかしさを感じ、立体感のある石彫を本格的に始めました。硬くて冷たい石を使って軟らかさや温かさを表現してみたいと思いました。

今回の受賞作 動」は、今の社会の世相を私なりに表現してみました。人との出合い、物との出合い、みんなそれぞれ意味のある出合いになっております。そして石は私の創造をどんどん膨らませてくれます。

これからも創作に、活動に精進して参りたいと思っております。最後になりましたが今後の新日本美術協会のますますの発展をお祈りいたします。有り難うございました。

会長賞　祭の夜」(工芸)小林由美子

この度は会長賞を頂き有り難うございました。これ迄、水指しや食籠や皆具等茶陶器を中心に出品して参りましたが、今回は我が家に長年住み続け巨大に育った金魚をモデルに、黒い水槽に泳ぐ魚絵の壺を出品させて頂きました。

何年か前より、黒土をキャンバスと見なし、その上に群れをなす魚を表現したいと試行錯誤を重ねつゝ制作して参りました。思い通りには焼き上がりませんが、これからも白い魚形の中に多色釉の濃淡を加え、光り輝く海を泳ぐ魚群の黒の世界を表現していきたいと思っております。

新人賞　葉刻文広口臺(工芸)岡本龍司

焼き物を始めて早、十数年。日々土と触れあってきて感じることは、自分自身の中にたくさんの自分が生まれてくるという事です。

楽しいとき、苦しいときなど、いろいろな思い、感情があふれ出て、それを土に表現していくことが私にとって陶芸であり、モノを創るということです。

モノを創り出すという作業は、人間だけが出来るモノであり、それを 美」として捉える事が出来るのも人間だけのものです。これはとても素晴らしいことです。

人は、すさまじい速さで進歩してきた分、何かを忘れているのでは？と思っています。便利主義の今(私もその一人ですが)モノ創りは五感を最大限に使い、表現していくことの出来る人が持っている素晴らしい財産だと感じています。

器は人々の生活の中で切っても切れない身近なモノです。お気に入りの器で食事をし、お茶を飲む。日常生活の中に、幸せな気持ち、豊かさに気付かされることがあります。

私は創り手として、この賞を糧に、これからも日々「モノ創りとは何か？」を自身に問いかけながら、たくさんの人の心に届くような、作品創りに挑戦していきます。

最後に、自分を育ててくれた、両親、先生方、応援して下さっている皆様に感謝の気持ちを込めて。有り難うございます。

思いがけず今回の作品で大きな賞を頂き、迷いもあった作陶の表現方法でしたが、少しの自信を得て次の制作に励みたいと思います。有り難うございました。

(授賞式当日の朝、先の金魚の水槽掃除をし終え立ち上がった途端ギックリ腰。全く動けず式を欠席。金魚は何を言いたかったのか。甘えるな。さらなる努力を。でしょうか。)